

# 藤原農園

藤原農園 藤原浩俊さん  
朝倉市／就農14年目

BLOF理論はそのまま農場で使え、  
慣行栽培以上の生産は可能です

食べて健康につながる野菜を  
毎日の食卓に出せる価格で提供  
していきたい

前職は県の農業関連団体に勤めていた藤原さん。平成23年に発生した東日本大震災から得た気づきが転機となって、同年に団体を退職。朝倉市内で農業をしている藤原さんの実家の後継ぎとして就農しました。

その後、藤原さんは、地元朝倉市でアグリガーデンスクール&アカデミー（以下「AGSA」）が開講されることを知り、1期生として学ぶことに。卒業後、トマトの栽培を慣行からBLOF理論に基づく栽培に転換。また、AGSA受講生で新規就農を希望する方を研修生として受け入れるようになりました。藤原農園は、国の新規就農支援の対象となる研修機関に認定されています。藤原農園は、これまでに7名の研修

生に実技指導を行うとともに、一部の研修生には就農（独立）の際に販路の開拓もサポート。

現在、藤原さんは認定農業者であり、県の認定農業者組織連絡協議会の会長職も務めています。

## 藤原農園

栽培品目:野菜(ハウス、露地)、柿(慣行栽培)

経営面積:約1.8ha(野菜60a 柿80a等)

販路(野菜):小売企業への直接販売、飲食店等

農園産の柿を加工・販売する企業への出資

## 有機栽培の実践

藤原農園では、主に夏は露地でオクラ、ハウスでトマト、冬は露地でほうれんそうとタマネギを栽培。この他、ソルゴー（緑肥用）を栽培。BLOF理論に基づき、堆肥（有機質資材）の施用と太陽熱養生処理による物理性・生物性の改善、堆肥と有機肥料によるアミノ酸の補給、土壌分析・施肥設計に基づくミネラルの補給を実践。

こうした取組により、毎年の天候等による変動はあるものの、慣行栽培と比べても遜色のない、あるいはそれを上回る収量を確保しています。



ハウスで栽培中のトマト。わらともみ殻を有機マルチとして活用

（写真は藤原農園提供）



取材時に試食したほうれんそう。甘味があるとともに、えぐみを全く感じません。

## 有機栽培の実際取組内容

### 1. 堆肥（有機質資材）と太陽熱養生処理を用いた物理性・生物性の改善

- ・ホウレンソウの栽培前に、緑肥（ソルゴー）を作付け。一定の草丈に成長する度に機械で刈取り。それを3回繰り返し、最後（8月頃）にすき込み。
- ・トマトの栽培では有機マルチ（資材はわらともみ殻）を使用。
- ・毎年、ホウレンソウの施肥の時期に、10a当たり豚ふん堆肥を約0.5t、微生物資材を約200L投入し、約80日間、太陽熱養生処理を実施。
- ・微生物資材（バチルス菌、乳酸菌、酵母菌）はスーパーで購入した納豆、ヨーグルト、ドライイーストを用いて自家培養。

### 2. 有機肥料によるアミノ酸の供給

- ・トマトは、10a当たり基肥12kg、追肥3kgを施用。
- ・ほうれんそうは基肥8kgを施用。

### 3. 土壌分析・施肥設計に基づいたミネラルの供給

- ・土壌分析は基本的に毎作実施。
- ・外部の検査機関に体積法による土壌診断を依頼。

#### 【検査項目】

pH（酸度）、アンモニア態窒素（NH<sub>4</sub>-N）、硝酸態窒素（NO<sub>3</sub>-N）、可給態リン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）、カリ（K<sub>2</sub>O）、石灰（CaO）、苦土（MgO）、可給態鉄（Fe）

- ・土壌分析の結果とBLOF理論に基づいた施肥設計ソフトを用いて、ミネラル等の不足分を算定。ミネラルは市販品を購入して施用。

### 4. その他の取組

- ・トマトは、ミネラルや植物由来の忌避成分の入った資材を葉面散布。
- ・手作業と機械でほ場及び周辺を除草。

## 経営面の取組・工夫

藤原農園では、研修生を含めた3人で農場を管理しています。

生産した野菜は、県内でスーパーをチェーン展開する小売企業に販売するほか、インショップ業者等に直接販売しています。

なお、柿（慣行栽培）については、平成29年に加工場を整備し、ドライフルーツの製造・販売を実施。その後、本業の農業が多忙になったことから、現在は地元の企業（果物加工・販売）への出資に留めています。



ズッキーニの播種作業に取り組んでいる研修生



店頭で販売されているほうれんそう

(写真は藤原農園提供)

## 今後の展開

藤原農園は、農園の経営ビジョン「健康産業としての農業の未来を切り開く」を実現するため、野菜については今後とも、BLOF理論を基本に生産を行う方針です。

同時に、納品価格が一定でかつ需要が見込め、計画的な規模拡大が可能となる業務用野菜にシフトしていきたいと考えています。当面は、業務用野菜の需要量（ロット）に対応できるよう、藤原農園の規

模を拡大するとともに、需要者と複数の生産者の間を取り持つ中間事業者の確保が、最も大きな課題となっています。また、法人化も今後の検討課題です。

藤原農園の活躍によって、有機農業の拡大、担い手の育成が一層進むとともに、中間事業者を介した取引が実現することで、業務用需要に対応した有機農業による生産・流通のモデルにもなることが期待されます。

もっと聞いてみました！

**Q. AGSAで学ぶ意義は？**

**A.** AGSAではエビデンスのある農業を学べます。AGSAで学ぶことで、有機農業での農業経営の可能性が開けます。慣行栽培以上の収量が可能であるからです。

一方、どうしても有機栽培というと、「量が穫れない、虫が多くなる、手間がかかるため高い価格で売らないと採算が合わない」といった認識があり、なかなか広がらないのが現状です。

しかし、AGSAでBLOF理論を学ぶと、その理論はそのまま農場で使え、量はしっかり穫れます。当農園でも野菜の栽培中に化学合成農薬を使用したことはありません。

**Q. 柿は慣行栽培であるのは？**

**A.** 野菜は土を耕し、土壌の状態を分析しながら育てられますが、果樹は苗木を定植後は何十年も耕しません。加えて、重量のあるスピードスプレイヤー（液状の農薬を散布する機械）が使われていることで、どうしても土壌が硬くなります。何より最大の敵がカメムシであり、どこからか大量に飛んできて、樹液や葉腋を口で刺して吸引します。

虫が物理的に「刺す」行為に、今のところ、化学合成農薬を使用せずに柿を栽培することは難しい状況です。

柿の有機栽培（化学合成農薬不使用）を実現する技術体系の確立に、今後期待します。

**Q. 野菜(トマト)の栽培に市販(慣行栽培)の種子を使うのは？**

**A.** トマトの苗は、毎年、市販の苗（F1品種）を購入しています。もちろん、有機栽培の理想を追求し、種子から有機で栽培を行う選択肢もあります。ただ、現実の経営を、種子を自前で確保する手間を考慮し、現在は、市販品を購入する選択をしています。

**Q. 職業に農業を選択。今、思うことは？**

**A.** 農業を始めて思うことは、①農業はモノづくりである（低コストで高品質な農産物の生産を、創意工夫、PDCAを実践して実現する楽しさがある）、②経営の楽しさが農業にある（何を作るかどこに販売するか、商品開発等を自由に出来る楽しさがある）、その一方で、③農業は難しく、大変である（暑さ寒さの中での作業・栽培の失敗・販売の難しさが農業にはある）、ということです。

